

アフリカ・セネガル共和国における青年海外協力隊員の手工芸教育実践

Educational Contribution in Making Crafted Products by Japan Overseas
Cooperation Volunteers in Republic of Senegal, Africa

横山真智子・杉原利治

YOKOYAMA Machiko and SUGIHARA Toshiharu

要 旨

本報では、セネガル共和国における青年海外協力隊員の活動の中で、特に手工芸に関する教育実践について報告する。まず、家政系の学校である国立社会家庭経済教育学校（ENFEFS）の教員や生徒を対象とした実践について、目的、題材の設定、製作物、指導法、教育体制などの問題点と解決法を検討した。そして、手工芸教育を実践する上で、隊員と学習者との人間関係、隊員間の協力、活動先と他の組織との関係性が、受益者となる対象者のキャパシティ・ディベロップメントに対して大きな影響を与えることが明らかとなった。次に、地域社会の女性グループに対する実践では、「ものづくり」を活動に取り入れている隊員同士が研修を行うことで、隊員自身が新しい技術を身につけ、実践指導を行うことができること、また、隊員によって企画されたアイデアコンテストによって女性グループのメンバーたちの意欲が高まり、その後の「ものづくり」の活性化につながるということが明らかとなった。

キーワード：教育実践，ものづくり，手工芸，青年海外協力隊，セネガル共和国

「ものづくり」は、人間の活動の中で最も重要なものであり、経済産業活動のみならず、家庭や教育機関など、さまざまな場で行われている。我々は、前報で、青年海外協力隊活動における「ものづくり」の意義について、セネガル共和国での事例をもとに報告した¹⁾。本稿では、この「ものづくり」実践を、1998年10月から2006年3月までの約7年半にわたって、国立社会家庭経済教育学校（Ecole Nationale de Formation en Economie Familiale et Sociale: ENFEFS）において、手工芸の授業を担当した4人の協力隊員の活動を中心にして、詳細に報告する。また、それらの活動を通して学校組織や同僚教師へ与えた影響とともに、学習者のキャパシティ・ディベロップメント（Capacity Development: CD）への貢献や外部者としての協力隊員の役割についても検討する。さらに、村落地域における「ものづくり」実践について、そこでの6人の協力隊員の活動内容とともに、隊員間や各種組織との「関係性」が「ものづくり」に及ぼす影響について包括的な視点から考察する。

1. 青年海外協力隊員の報告書

青年海外協力隊事業は、「相手国の要請に基づき、国内で募集選考した技術・技能を有する20歳～39歳までの日本の青年男女を訓練の上、相手国に派遣する事業²⁾」であり、「途上国に概ね2年間滞在し、農林・水産、保健衛生、教育文化等の分野において、相手国の人々と生活や労働を共にしながら、相手国の社会的、経済的発展に協力するもの³⁾」である。また、平成14年度より現職教員特別参加制度ができたため、その制度を利用して、小学校教諭や家政、体育、理数科教師として活動している隊員がいる。

協力隊員の派遣国や隊員数、職種ごとの人数などは、前報告の通りである¹⁾。これまでセネガルに派遣された隊員のうち、「家政」、「手工芸」、「技術科教師」、「水産物加工」が「ものづくり」を主な活動としていた。しかし、これらの隊員の他にも「村落開発普及員」が村落地域における住民の生活

表 1 隊員活動報告書のテーマ及び提出書類

提出書類	時 期	内 容
第1号報告書	赴任3カ月	(1)任国事情 受入国の印象、現地語学訓練、生活事情や食料事情、安全対策及び、健康管理での留意点等、自由に記述 (2)配属先の概要 配属機関名、配属先の組織と規模、外国の援助の有無等についてできるだけ詳細に記述 関連の資料等あれば添付
第2号報告書	赴任6カ月	(1)受け入れ国での生活 生活上の創意工夫、受入国の人との交際、語学の習熟度、余暇の過ごし方等について自由に記述 (2)受入国の業務水準 担当業務の受入国での状況、日本と異なる点、特に留意すべき事項、今後の協力が必要な分野等について具体的に記述
第3号報告書	赴任12カ月	(1)業務内容の概要 受入希望調査表との差異、配属先同僚の技術レベル、隊員の配属先での位置づけ、業務上の障害と対策等について自由に記述 (2)支援体制 支援経費の使用計画／報告、その他の支援（草の根無償等）の必要性、活動期間延長の有無と後任の必要性等について具体的に記述
第4号報告書	赴任18カ月	(1)任国内旅行・任国外研修旅行 任国内旅行や任国外研修旅行での体験、任地や任国との比較、後続隊員に参考となる情報等について自由に記述
第5号報告書	赴任24カ月以降	(1)活動期間を終了する場合 活動計画の達成度、全期間の協力効果、後任隊員への要望、今後の協力の見通し等について具体的に記述 (2)活動を延長する場合 活動期間延長の理由、延長期間の活動計画等について記述（最終報告書にて、上記(1)の内容を記述）

【出典：JICA、『隊員ハンドブック』、JICA青年海外協力隊事務局、p.26、2002】

向上をめざし、その活動の一環として、手工芸品づくりや染色を行っている場合がある。本稿では、これらも含め、青年海外協力隊員の報告書をもとに、ENFEFSでの手工芸の授業実践と地域社会における「ものづくり」の実践についてまとめた。

派遣された協力隊員は、その活動中、第1号～第5号の報告書を提出することになっている。提出時期、及び内容は、表1の通りである。

派遣された隊員の報告書は、原則として公開されており、JICA地球ひろば・ひろばライブラリーにて閲覧できる。また、事前に依頼をしておけば、複写も可能である。

本稿では、表2の隊員10名の報告書より、その活動内容とそれらの活動による援助対象者の変化について考察した。ENFEFSでの手工芸の実践内容については、A～Dの4名の家政隊員の報告書をもとに7年半の活動内容とその成果をまとめた。また、女性技術教育センターや村落地域でのものづくりについては、E～J隊員の報告書を中心に「ものづくり」の活動内容を紹介した。尚、各隊員の派遣期間は、表2の通りである。ただし、派遣後1ヶ月ほどは、現地にて語学訓練があるため、実際の配属は、その後となる。

表2 セネガル共和国における「ものづくり」実践者一覧

	性別	職種	派遣期間	配属先	手工芸教育の内容
A隊員	女性	家政	1998年7月～2000年7月	ENFEFS	刺繍，マクラメ，クロスステッチ，ぬいぐるみ等
B隊員	女性	家政	2000年7月～2002年8月	ENFEFS	セネガル刺繍，フランス刺繍，マクラメ，布の花，かぎ針編み，ビーズ小物等
C隊員	女性	家政	2002年7月～2004年3月	ENFEFS	かぎ針編み，フランス刺繍，ビーズ小物，メッシュフラワー，マクラメ等
D隊員	女性	家政	2004年7月～2006年3月	ENFEFS	甚平，ビーズ小物，等
E隊員	女性	保健師	2002年7月～2004年7月	診療所	ビーズアクセサリー等
F隊員	女性	村落	2004年4月～2006年4月	農村普及局	染色，石けんづくり（増量），改良かまど等
G隊員	女性	家政	2004年12月～2006年12月	女性技術訓練センター	鍋つかみ，ビーズアクセサリー，ブラウス，帽子，ぬいぐるみ，かばん等
H隊員	男性	村落	2005年4月～2007年4月	地域開発支援局郡事務所	ビーズアクセサリー，改良かまど，染色等
I隊員	女性	村落	2006年10月～2008年10月	農村開発局郡事務所	石けんづくり（増量），ニームクリーム，チューライロウソク，ブイ（バオバブの実）等
J隊員	女性	村落	2006年10月～2008年10月	農村開発局県事務所	かばん，ポシェット，ぬいぐるみ，帽子，ビーズアクセサリー等

2. セネガル共和国での手工芸教育の場

セネガル共和国における一般的な「ものづくり」については、既に前報で報告した¹⁾。ここでは、

教育機関における「ものづくり」の事例として、ENFEFSでの手工芸の授業実践を取り上げる。また、村落地域における一般的な「ものづくり」の実態についても述べる。

(1) ENFEFSについて

セネガル共和国に数ある教育施設の中でも、ENFEFSは、家政系の最高学府といえる学校である。所管する省庁は、国民教育省、職業訓練識字教育省、教育省と7年半の間に幾度か変更している。2009年時点では、Ministère de l'enseignement technique et de la formation professionnelle (技術教育職業訓練省) が所管している⁴⁾。また、Centre d'Application (専門課程：4年制)、Cycle Moniteurs (指導員養成課程：2年制)、Cycle Maîtres (教員養成課程：2年制)、Cycle B.T.S. diététique (栄養学上級技術者養成課程：2年制) が設置されている。

各課程への入学するためには、表3、4の条件を満たし、選抜試験に合格しなければならない。この条件からもわかるように、各課程に入学する生徒の学習歴には大変大きな差異がある。また、ENFEFSでの学習目的は、職業訓練のため、農村部で活動する普及員になるため、センターなどの教員になるため、管理栄養士になるためなど、在籍課程によって異なっている。日本でいうならば、家政系の専門学校、及び家政系短期大学、教員養成大学が集まった学校のようなものである。

専門課程は、Couture (洋裁)、Restaurant (レストラン)、Social (社会；家庭科分野全般、2003年10月よりTechnique de Collectivité：TCに名称変更) の3つの科がある。そして、卒業までに職業適性証書 (Certificat d'Aptitude Professionnelle：CAP)、職業教育修業免状 (Brevet d'Etudes Professionnelles：BEP) 及び、技術者免状 (Brevet de Technicien：BT) の取得が可能である。

1年目は、3つの科ともフランス語、数学、農業などの一般教養科目と調理、

食品学、裁縫などの家政系科目を2つのグループに分かれて履修する。1年目は、科に分かれず、全員が共通の学習をする。共通履修期間において、全23単位が必修であり、その中に手工芸と刺繍は1単位ずつ含まれている。2年生からは、希望に応じて選択した科ごとに分かれ、それぞれの専門科目を中心に学ぶが、手工芸は、どの科の生徒も必ず履修する。

4年目は、実習が中心となる。社会科は、保健施設、手工芸センター、幼稚園、レストランと幅広い分野で実習する。2000年度の場合、4年生は、それぞれの施設で2か月ずつ実習した。洋裁科は、市内の大きな洋裁学校や校内のアトリエで実習する。レストラン科は、市内の高級ホテル (2軒)、学校が経営するレストランで、厨房とサービスを実践する。2000年の場合は、これらの3か所を2人1組で3か月ずつ実習した。このように、専門課程は、職業訓練を目的としている。

指導員養成課程は、2年間学んだあと、指導員適格証書 (Certificat d'Aptitude aux Fonctions de Moniteur d'Economie Familiale et Sociale：CAFMEFS) が取得できる。この指導員 (Moniteur/Monitrice) は、日本でいう普及指導員 (平成16年までは生活改良普及員) のような仕事を行う。卒業後、農村普及局などに配属され、公務員の職を得ることができる。また、地方の農村部で指導にあたるためには必須の資格で、セネガルでは、ENFEFSでしか取得できない。

表3 ENFEFS入学条件一覧

課程	入学条件
専門	4ème (日本の中学2年) 以上の者で、選抜試験合格者
指導員養成	中学卒業資格 (BFEM) 取得 高校卒業資格 (BAC) 取得者も可
教員養成	指導員資格 (CAFMEFS) 取得 指導員養成課程の平均成績が12/20以上の者 4年以上の実務経験 (指導員として) があり、 教育省の実施する選抜試験に合格した者
栄養学B.T.S	高校卒業資格 (BAC) 取得

表4 ENFEFSの入学条件, 修学期間, 専門, 取得可能資格, 進路等 (学校パンフレットより)

1) Les Types de Formation		1 - FORMATION INITIALE		PRESENTATION	
Formation	Conditions d'Entrée Niveau	Durée de la Formation	Spécialité	Diplôme délivré	Débouchés
Cycle C.A.P. BEP-BT * Centre d'Application	Concours organisé par le Ministère de l'Education Nationale pour les jeunes du Niveau de la 4ème.	4 ans	- Couture/Confection - Restauration - Sociale	- C.A.P. - B.E.P. - B.T. En Economie familiale et sociale	- auto-emploi - unités de production de leurs spécialités - Restaurants, hôtels, cliniques, centre de soins, industrie de confection - Ambassades - PME / PMI...
* Cycle Moniteurs	- Concours organisé par le Ministère de l'Education Nationale Niveau : DFEM ou équivalent - Etrangers admis sur titre	2 ans	- Economie familiale et Sociale	Certificat d'aptitude aux fonctions de Moniteur, d'Economie familiale et sociale (C.A.F.M.E.F.S.)	- Fonction Publique - O.N.G. - Projets de développement - PME / PMI...
* Cycle Maîtres	- Concours professionnel organisé pour le MEN pour les moniteurs d'Economie Familiale ayant 4 années d'expérience professionnelle - Etèves du cycle moniteurs ayant une moyenne de 12/20 - Etrangers admis sur titre et expérience professionnelle.	2 ans	- Restauration - Couture / Confection - Sociale	Certificat d'Aptitude à l'Enseignement de l'Economie Familiale et Sociale (C.A.E.E.F.S.)	- Fonction Publique - Centres de Formation - PME / PMI - O.N.G. - Projets de Développement Communautaire...
* Cycle B.T.S.	- Concours organisé par le MEN pour les Bacheliers des séries scientifiques - Professionnels - Etrangers admis sur titre	2 ans	Diététique	Brevet de Technicien Supérieur en Diététique	- Structures de Formation - Structures Sanitaires - Projets, O.N.G., Hôtels - Recherche (labo, Industries) - Industries agro-alimentaires

NB : Ces 3 cycles de formation sont ponctués par des visites et stages en milieu rural, ou semi urbain ou hospitaliers ou en entreprises.

教員養成課程への入学が可能な者は、指導員として4年以上の実務経験があり教育省の実施する選抜試験に合格した者と、指導員養成課程を卒業する学生で1年の平均成績が12/20以上の者である。2年間、レストラン科、洋裁科、社会科に分かれ、社会家庭経済(家政)の教員資格(CAEEFS)取得をめざして学ぶ。卒業後は、CRETFやCETFなどの女性技術教育センターで指導者となる。このCAEEFS資格も、セネガルでは、ENFEFSでしか取得できない。

栄養学上級技術者養成課程は、2001年10月に開設された。就学期間は2年間で、卒業時に資格試験があり、合格すると上級技術者免状(Brevet de Technicien Supérieur: BTS)の資格が与えられる。卒業後は、主に教育機関や病院などの保健機関、研究施設などで働く者が多い。実習よりも座学の多い課程である。したがって、この課程では、調理以外の「ものづくり」は行われていない。

指導員養成課程と教員養成課程では、「ものづくり」に関わる科目として、手工芸、調理、染色、裁縫が必修となっている。日本の家政系と異なるのは、必修教科に、農業や飼育、識字、染色が含まれることである。

また、指導員養成課程の生徒は、1年目の夏休みに3週間産院実習(stage maternité)へ、2年目は1ヶ月半~2ヶ月ほど、村に泊まり込んで分析実習(stage d'analyse)を行う。具体的には、村の生活(人数構成、収入など)を調査し、そこでの生活向上や収入源確保のための計画(projet)を考える。その後、レポートを提出し、それにより、実習が評価される。

教員養成課程の生徒は、1年目の夏休みに、1ヶ月半ほど企業実習(stage entreprise)に行く。社会科の生徒は、村落開発のプロジェクトへ、レストラン科は、首都や観光地にあるホテルレストランへ、洋裁科は市内の大きな縫製会社に行く。

職員は、校長・教頭・秘書・実習担当・教室管理責任者・出席管理者等、生徒に直接授業しない管理職や事務職が16名、professeurの資格をもつ教授が14名、Maitreの資格をもつ教員が27名いる(2002年10月時点)。

生徒数は、専門課程の1年目が31名、2年目24名、3年目20名、4年目17名で、指導員養成課程1年生35名、2年生24名、教員養成課程1年生27名、2年生20名、栄養学上級技術者養成課程1年生が21名である(2002年10月時点)。実習を伴う授業の多くは、グループや科ごとに行われ、1クラスの生徒数は15人以下である。また、専門課程の生徒は、すべて女性であるが、指導員養成、教員養成課程は、1/3~1/2ほどが男性(ただし、社会人学生はすべて女性)である。また、栄養学上級技術者養成課程は、2001年の初年度入学者12名のうち、男性10名、女性2名と男子学生の人数が多い。男子生徒は1992年に1名入学し、それ以降、徐々に増えている。

表 5 ENFEFSの生徒数 (2000年度, 人)

課程・学年	レストラン科	社会科	洋裁科
専門・共通履修 (1年目)	30		
専門・1年生 (2年目)	9	10	6
専門・2年生 (3年目)	8	9	5
専門・3年生 (4年目)	6	4	4
指導員 1年生	30 (女19, 男11)		
指導員 2年生	24 (女15, 男9)		
教員養成 1年生	6 (女5, 男1)	21 (女16, 男5)	0
教員養成 2年生	13 (全体で女10, 男9)	6 (全体で女10, 男9)	0

また、年間の授業料は専門課程、指導員養成、教員養成課程が27,000～56,000fCFAなのに対して、栄養学上級技術者養成課程は、年間200,000CFAである (1ユーロ= 655.9347fCFAの固定, 1fCFA= 約0.2円)。ただし、生徒たちは、成績に応じて金額は異なるが、授業料以上の奨学金が得られる制度がある。

(2) 村落地域における「ものづくり」

村落地域の住民の生活向上のために活動する協力隊員は、主に村落開発普及員である。しかし、村落開発普及員として活動する隊員 (以下、村落隊員) すべてが、「ものづくり」を行っているわけではなく、野菜栽培や養鶏などを行う者もいる。また、その他の職種の隊員が、本来の活動の合間に「ものづくり」を行ったり、複数の隊員が共同でセミナーなどを開いたりして、そこで「ものづくり」が行われる場合もある。そして、「村」単位で全体に呼びかけたり、組織をつくったりして活動する場合が多い。

3. ENFEFSにおける授業実践

(1) ENFEFSの要請と協力隊員活動内容

ENFEFSからの要請を受けてJICAが記した受入希望調査表には、『家庭一般技術 (手工芸・編み物・裁縫・料理等) が望まれるが、中でも手工芸分野の刺繍 (マクラメ・かぎ針) やアートフラワー (ペーパーフラワー) の広い技術が要求され、それを生徒に対し指導する。なお、授業運営に関しては、効果的な授業運営を目的に、セネガル人教員と一緒にやる。また、現地教員への技術指導や新技術の導入を図り、質を高めることも望まれていることから、2年程度の教員経験が必要とされる』とあった。1998年～2000年に活動したA隊員は、これらの要請内容に大きな差異はなかったと報告している。そして、実際に、刺繍の技術の向上に尽力した。ただ、B隊員の報告によると、刺繍やアートフラワーの要請は強いが、ほとんどなされていないという。なぜなら、現地の材料では、満足できるだけの完成度に仕上げられないからである。また、布の花では、安っぽく見えるなど、セネガル人の好みに合致しないという問題点があった。さらに、C隊員は、ペーパーフラワーの技術が特に求められているというわけではない、また、現地で材料が手に入らなければ、いかに良いものであっても製作しようがないと報告している。そこで、似たようなものとして、メッシュフラワーに挑戦したが、よく伸びる布を探すのが困難であることと、ペンチが必要になることから、1クラスのみの実践で終わってしまった。基本的な技術としては、かぎ針編みとフランス刺繍と考えていいだろう。その他の技術については、マクラメとビーズに人気があるので基本的な技術があればすむ。各隊員には、マクラメに関する知識は、セネガルに赴任するまでほとんどなかったが、本や実際の作品を見れば、作り

方は理解できる。セネガル人の教員は、これらの基本的な技術を持っているので、むしろ多くのデザインを提案することが望まれている。デザインの参考になるフランス語の図書は多くないため、写真や図でわかりやすく解説してある日本のものでも十分に役立つ。基本的な技術を身につければ、生徒は自分で工夫し応用作品をつくっていくことができる。

現地教員への技術指導に関して、特別に教える時間はなかなかもてなかった。放課後や休憩時間、休日などを利用することもあったが、同時進行で生徒とともに「一緒に学ぶ」という姿勢の現地教員が多かった。

(2) 隊員の立場と役割の経年変化

A隊員は、家政(家庭科)の教師という立場でENFEFSに派遣され、特に刺繍の技術の普及に努めた。A隊員が派遣されるまで、手工芸の授業では、レース編み、マクラメ、パッチワーク、ペーパーフラワーなどが中心に行われ、刺繍はほんの数時間のみであったという。本格的に刺繍を指導できる教員がいなかったためである。そのため、A隊員の刺繍の技術に対する現地の教員や生徒の関心は非常に高く、どのクラスでも刺繍に取り組みたいという希望が強くあった。1998年度、A隊員は、週に26時間、5人の教員とともに手工芸の授業を担当し、刺繍の基礎ステッチから作品づくりまで、学年に応じて指導した。どのクラスも、刺繍から始めたため、作品見本を製作する時期が集中して大変であった。初年度は、1年目ということもあって、あれもこれもと広く浅く指導したため、中途半端な指導で終わってしまったのではないかとA隊員には思われた。そして、刺繍の技術のすべてではなく、セネガルで効果的であるものを重点的に確実に指導することが大切であると感じた。さらに、A隊員は、セネガルで求められる刺繍の技術について、①コストを抑えて庶民にも浸透するものにする、②経済的自立の糧にするために少ない時間で量産することを考慮し、セネガルの実情に応じた刺繍の指導の大切さを指摘している。

2年目は、刺繍だけではなく、マクラメやぬいぐるみなど、多種多様なものに挑戦した。2年目に提案した題材は、ほとんどすべてのクラスで受け入れられ、結果的に多くの新技術を導入することができた。2年目に提案したものが受け入れられたのは、A隊員が、セネガル人の好みを把握し、多種多様な見本を常に用意し、視覚に訴え、教員や生徒のやる気を喚起したためである。

このように、初代のA隊員は、刺繍技術を中心にENFEFSの教員や生徒の技術の向上に努め、信頼関係を築いた後、マクラメなど他の技術を伴う新しい手工芸品の製作を提案していった。

A隊員の活動を引き継ぎ、B隊員は、さまざまな手工芸品を提案していった。2000年度は、週20時間、5人の教員とともに手工芸の授業を行った。その内容は、かぎ針編み、フランス刺繍、セネガル刺繍、マクラメ、そして「布の花」である。布の花は、ENFEFSから「アートフラワー」の指導に対する要請があったが、材料が入手できないなどの理由により、それに代わるものとして導入したものである。しかしながら、ゴージャス好きのセネガル人には、地味に見えるため、あまり好まれなかった。また、フランス刺繍では、刺繍糸が高価なため、学校の費用で材料を購入することになる。結果として、生徒たちは、学校のために「働く」ことになり、つくった作品が自分のものになる場合と比べ、意欲が高まらなかった。そこで、セネガル人のおしゃれに注目し、流行を取り入れることで、生徒たちの製作意欲の向上を試みた。さらに、できるだけ多くの作品見本をつくることで、自ら「つくりたい」ものを題材として取り入れていった。

また、2002年度から手工芸の授業を担当したC隊員は、①授業における生徒に対する指導、および教員に対する助言、②新しい題材の開発(デザインやアイデアの提供も含む)、③セネガル人とは異なった視点から見た授業や学校運営に対する意見や改善点の助言を中心に活動を行った。そして、協力隊員が「援助をする」というよりもお互い持っている技術やアイデアを「交換する」というスタンスで臨んだ。また、ENFEFSの校長からもそのように期待されていた。

A～C隊員は、基本的に、手工芸の授業を現地の教員と一緒に担当した。隊員と教員の授業内の役

割は、クラスにより異なったが、セネガル人教員は、授業進行を担当し、隊員は、授業の題材を提案や、授業中の技術指導を行うことが多かった。クラスによっては、はっきり役割分担をせず、2人で、進行と技術指導を行うなど、臨機応変に対応した。クラスごとに、担当するセネガル人教員が替わるため、手工芸授業での隊員の立場もやや異なる。忙しい教員に代わって、隊員が一人で授業を担当することもあった。

例えば、2002年前期の手工芸の時間割は、表6の通りである。これらの授業を担当するセネガル人教員は、クラスごとに異なる。そのため、C隊員は、8名の教員とT.T. (チーム・ティーチング) で手工芸の授業を行った。2004年度から派遣されたD隊員は、食分野の専門家という意識が強かったため、小物づくりにかかわる活動は、それほど多くなかった。

表6「手工芸」時間割 (2002年度)

	1時限 8時～9時	2時限 9時～10時	3時限 10時～11時	4時限 11時～12時	5時限 13時～14時	6時限 14時～15時	7時限 15時～16時	8時限 16時～17時
月	専門・共通履修G2 (1年目)				専門・社会2年 (3年目)			
	教員・社会1年G2 指導員・2年G2 (隔週)						教員・社会1年G1	
火	専門・社会2年 (3年目) 調理		専門・レストラン1年				指導員・2年G1/G2 指導員・1年G1 (隔週)	
水			指導員・1年G3 (隔週) 教員・レストラン・1年		専門・共通履修G1 (1年目)			
木	専門・社会1年 (2年目)						専門・レストラン 2年 (3年目)	
	指導員・2年G1 (隔週)							
金	専門・洋裁2年 (3年目)				専門・洋裁1年 (2年目)			
					教員・洋裁1年		指導員・1年G2 (隔週)	

(3) セネガル人教員の技術レベル

手工芸担当教員とともに授業を行いながらわかったのは、どの教員の技術レベルも、「援助」を必要とするほど低くないことであった。全員、かぎ針編みと刺繍の指導ができる。したがって、意欲・技術ともに高い教員を中心に、手工芸や生徒に対する指導技術の交流を図れば、授業レベルアップにつながっていくと思われた。しかし、実際には、教員一同が顔をそろえることが少ないため、そのような時間の設定は難しかった。手工芸を担当していない教員の中にも、高度なクロスステッチの技術をもつ者がいる。今後、教員同士が互いに研修しあう場を設定すれば、より一層の手工芸や指導技術の向上につながると考えられた。そこで、教員のレベルアップを図るために、A～C隊員は、授業中、生徒に指導を行う一方で、教員にも新しい技術を伝えたり、授業以外の時間を利用して講習会を開いたりするなどの工夫を行った。

また、ENFEFSでは、教員養成課程の4年生の実習を受け入れ、指導を行っている。実習生たちは、手工芸は担当していないが、調理、被服製作、住居維持、被服材料学、衛生学などの授業で実際に教壇に立つ。そして、授業後には指導教員から助言を受ける。つまり、「教える」技術に関してこの学校の技術レベルは、個人差はあるが全体的には決して低くはない。むしろ、個々の教員が持っている技術をすべて出しきろうとしているかどうか、という点が問題ではないかと思われた。

(4) 手工芸技術の意味と役割

ENFEFSにおける手工芸技術の習得は、専門課程の生徒にとっては、収入源を目的とした技術のひとつであり、教員養成課程の生徒にとっては、職業訓練校で教えるためのもの、指導員養成課程の

生徒にとっては、村の収入源を目的としたプロジェクト指導のためのものである。

Ecole d'application (専門課程)の1年目、TC (Tronc commun: 共通履修) の生徒たちは、手工芸の初心者が多い。かぎ針編みは、経験がある生徒もいるが、刺繍などは、針を持つのも初めての生徒がほとんどである。科ごとに分かれていないため、30人の生徒は、15人ずつ2つのグループに分かれ (G1・G2)、かぎ針編み、刺繍、マクラメなどの基礎を身につけることを目標とし、手工芸の授業を受ける。そして、各技術の糸の始末の仕方や、基礎ステッチ、基礎編みなどを指導し、簡単な応用作品をつくる。

1^e Année Option (専門課程の2年目、レストラン、洋裁、社会科を選択) は、科ごとに約10人ずつ3クラスに分かれ手工芸の授業を受ける。前年に1年間手工芸を習っているため、基礎はできている。そこで、再度、基礎を復習しつつ、新技術を身につけることを目標とする。そして、生徒の希望や販売可能なものを考慮に入れ、学校に材料費を要請して作品をつくる。生徒が自分で材料を購入することもある。

A隊員は、人は、よりよく生きるために学び、技術は、生きる手段であるという教育理念をもっていった。そして、卒業後も自分の意志と力で学んでいける人間の育成をめざしていた。貧富の差や男尊女卑など、セネガル社会における問題を自分の問題として受けとめ、それらの解消に努めることのできる人間愛や愛国心をもった人材の育成をめざして、協力隊活動を行っていた。当初は、お金を稼ぐための技術を身につけさせることを、手工芸の目的としていたが、活動の終盤では、生徒の心を育てること、つまり、自分自身の技術に対する自身と誇りをもたせることこそが目的であるとしている。

また、B隊員は、第5号報告書の中で、セネガルの家政において、「手工芸」の役割は大きいと述べている。ここでは、B隊員から見た手工芸技術の意味と役割について、それぞれの課程ごとにさらに詳しく見ていく。

一般的な手工芸は、日本では、時間と手間がかかる割には高い評価が得られにくく、趣味として行われている場合が多い。それに対して、セネガルでは、手工芸は収入源となるため、首都の女性グループが店を経営していたり、村の女性グループがプロジェクトとして行っていたりする。首都や主要都市にある家政系の職業訓練校でも、手工芸は必修教科である。

この手工芸には、主に、かぎ針編み、刺繍、アフリカ刺繍、マクラメ、ビーズ細工などの技術が使われている。これらは、セネガルにおいて需要が高く、国内で材料が購入できるので、個人や女性グループが収入を得るために製作・販売している。

実際、授業でつくったものを売って次の作品づくりの資金を得る生徒や授業で習ったも



図1 かぎ針編みのかばん



図2 かぎ針編みのテーブルクロス

のや発展作品を売って学習資金にする生徒がいた。また、学んだことを、女性グループを対象にしたプロジェクト指導で教えてきた生徒もいた。このように、授業での学びが発展した例が多く見られた。

(5) 題材の選定・指導計画・評価

手工芸の授業については、一般的に、生徒の意見を取り入れながら担当教員が選んでいくことが多い。その際の選択肢は、個々の教員に任されている。そのため、専門課程以外では、その年度ごとに扱う題材が異なっている。初回の授業で、授業計画について説明したり、生徒の意見をもとに内容を決めたりしていく。その後、各教員が年間指導計画を立てる。そのほかにも、単位時間ごとの指導目標を明確にした年間計画も作成している。年度初めに各教員は教頭に提出する。

ただし、専門課程の共通履修科では、かぎ針編みと刺繍の基本をきちんと身につけられるようにするのが目標であり、年によっての変化はない。各科に分かれた後は、学んだことのないものを選んだり、応用作品としてやや大きな作品に取り組んだりする。

指導員養成課程の1年も、かぎ針編みと刺繍の基本を身につけるのが目標である。2年生では、学んだことのないものを中心に、生徒の興味・関心に応じて題材を設定していく。

教員養成課程の1年は、応用作品に取り組むことが多い。社会人学生にとっては初めてのものでも、指導員養成課程から進学してきた生徒にとって復習になる題材もある。

手工芸の題材について、C隊員の実践を中心に述べる。

かぎ針編みは、セネガルの手工芸において最も基本的なものである。共通履修課程の授業においては、編み目記号を自分で読んで編めることを第一の目標とした。編み方の名称と編み目記号を用いた解説を載せたプリントを生徒に渡した。しかしながら、生徒の中には、自分で読み取ろうとする前に、

言葉での説明を求めてくる生徒もいた。一人で製作できるようにするためには、最終的に、編み目記号を読んで編むことができなければいけないので、まず、生徒が自分で復習しながら進めていけることを目標とした。それぞれの編み方で10×5 cmの標本をつくった後に、作品づくりにとりかかった。せっかくゲージをとっても、いざ作品となると、本の通りに編み目を数えてつくるため、でき上がり寸法がまちまちになる。



図3 フランス刺繍にかぎ針編みで縁飾り



図4 フランス刺繍のテーブルクロスにビーズで縁飾りをしているところ



図5 マクラメのつりかご

「この大きさのものをつくりたいから自分は何目にする」というように、ゲージをとる意味をきちんと指導していかなければならないと痛感させられた例であった。

セネガルでは、かぎ針編みでつくるものは、テーブルクロスなどの平面的なものが多いため、袋など、立体的なものは、生徒たちには目新しかったようである。基本の編み方の練習は木綿の糸を、作品づくりにはナイロン糸を利用した。ナイロン糸は滑りやすく、慣れていない初心者にはやや難しいが、色の選択肢が多く、仕上がりきれいであるためよく利用した。

フランス刺繍は、かぎ針の次に重要と考えられている技術である。書店では、フランスから輸入された手工芸雑誌が購入できるが、かぎ針編みよりも、刺繍の方が多い。しかしながら、図案がないと始められないこと、他の作品に比べて糸などの材料が高いこと、手順が複雑であることなどから、マクラメなどに比べると人気は高くない。

共通履修課程において、フランス刺繍の基本的なステッチを、名称とともに指導したが、自分で図案を考え、ステッチを決めるような

場を設定することまではできなかった。図案とともにステッチを指定することが多かったためである。初心者には難しいが、経験のある生徒には、どんなステッチが適しているか、生徒自身に考えさせるような授業展開を取り入れればよかった、というのが反省点であった。

また、図案の配置の仕方についても指導が十分でなかったため、布の中央に配置されていなかったり、左右対称でなかったりといった例もあった。経験がない生徒には、指導者が当然できると思いこんでいるような基本的なことからしっかりと指導しなければいけない。刺繍糸は、ミシン糸に比べると高価である。また、失敗すると糸を切ってしまうことがあるため、ミシン糸で練習した後に、刺繍糸を用いた作品づくりにとりかかるとよいと考えられ、そのように実践した。刺繍は、上達するまでに時間はかかるが、上手にできれば、それだけ技術として「売り」になる。しかしながら、洋服などに施す刺繍は、ミシンによるものが一般的であるため、手で刺繍してあるものに対する価値を見出す目を育てることも大切だと思われた。

セネガル刺繍は、ウォロフ語でTakk Pusso (タック・プッソー：takk=結ぶ、puso=針) という。もともとは、トゥッ



図6 セネガル刺繍の見本(右)と生徒作品(左)

クロールという民族の女性もっている技である。他に、ブジュンブラ（ブルンジという国の首都名）と呼ばれるステッチもある。太い糸を使い、ストレートステッチのみで、いろいろなモチーフをつくる。下絵も描かないで縫い始める。直線縫いが基本の刺繍であるため、慣れれば難しいことはない。服に刺繍をするには、時間がかかりすぎるので、2002年度は一通りの刺し方を練習しただけで終わった。クッションカバーなどセネガル刺繍を用いた簡単な作品を提案できるように見本もつくったが、授業で扱う時間がなかった。セネガル人であれば、誰でもできるというわけではない。C隊員は、B隊員の残した作品見本などを参考にして生徒に指導をした。ブジュンブラは、より高度な技術であるため、隊員が慣れても「教える」というのは難しかった。そこで、教員養成課程の生徒にのみ教えた。

マクラメは、数種類の結び方を覚えてしまえば、自分の好きなようにつくっていける点が良いところである。ただ、使う糸が、白か黒が一般的でカラーバリエーションに乏しいのが難点である。テーブルセンターなどの複雑なものより、吊りかごが生徒には好まれる。また、数種類の結び方の組み合わせで、いろいろなデザインが可能となり、オリジナリティーが出せる点でもよい題材である。生徒たちには人気が高い。一卷（単純な吊りかご2個分）2000fCFAの材料費は他のものに比べるとやや高めではある。

クロスステッチ用の生地は非常に高価であり、代用できる布を探すのも大変である。慣れれば、木綿布にもクロスステッチをすることは可能であるが、初心者にとってはとても困難である。見本はあるが、実際に授業で作品をつくることは難しく、練習のみで終わることも多かった。このような刺繍の技術もある、ということを知る程度に留めてもよいと思われる教材である。

ビーズ細工は、単純なものは、一直線に糸に通すだけでも仕上げられるため、幼い子どもでもつくることができる。ただし、高齢になると、小さな穴にビーズを通すことが難しい。生徒たちは、ビーズアクセサリーが大好きであった。2002年度に題材として取り上げた携帯ケースやかばんも人気があった。直線、面、立体の構成の仕方を覚えてしまえば、後は自由にオリジナル作品をつくることができる。また、はじめと終わりの糸の始末をきちんとすれば、初心者でもある程度レベルの作品ができる。逆に、経験をどれだけ積んでも初心者とでき上がりがそれほど違わないという面もある。一袋（100g）500fCFAのビーズで、ちょうど携帯ケースが1つできる。生徒たちは、それを2000～2500fCFAで売っているのだから、バカンス中の小遣い稼ぎには最適であった。アクセサリーは、デザインにもよるが、一袋で、ネックレス・ブレスレット・イヤリングのアンサンブルが一組以上はできる。留め具も25fCFA前後からある。



図7 ビーズの携帯ケース

メッシュフラワーでは、コサージュのような小さいものを基礎を身につけながら作成した。洋裁科の生徒は、卒業製作でウエディングドレスを仕立てるため、ウエディング用のブーケやブーツなどがつくるとよいのではないと思われる。伸縮性の高い布も1000fCFA/mで手に入る。また、針金もそれほど高価でない。慣れるまでやや難しいが、これまでセネガルではあまり見たことがないものなので、受け入れられれば、「新しい技術」となる可能性を秘めている。ウエディング用となれば、やや高めの価格で販売することも考えられる題材である。

スマック刺繍のクッションは、街でも見かけることがある。サテン地にスマック刺繍が施してある。

被服の応用であるので、洋裁科の生徒には特に技術を身につけるためにはいいようだ。1000fCFAほどの材料費（サテン生地1/2m,300fCFA, 内袋用木綿布1/2m,150fCFA, 詰め物のスポンジ300fCFA相当, 共布でくるんだボタン2個, 200fCFA）で2500fCFAの値で売れる。

このように、手工芸の授業において、いろいろな題材を扱うが、専門課程以外では、製作時間が短いものをいくつか組み合わせ、さまざまな手工芸技術にふれるのが望ましい。

共通履修科では、基本技術である刺繡とかぎ針編みを中心にして、教員

や生徒の意見を考慮しながら、実態に応じた題材を加えていくことが望ましい。2年目、3年目の生徒たちの授業では、それまでの担当教員によって扱った題材が異なることがあるため、学習したことのない題材を中心に、興味・関心に応じて選定していくことが大切であった。

手工芸作品の授業評価については、担当する教員によって差がある。毎時間、授業に取り組む姿勢を評価している教員もいた。その他、作品ごとに20点満点で評価し、学期末に平均を出し、手工芸の評価とする。各教科の点数を平均し、その平均値に単位数に応じて比重をかけて全教科の平均を出し、総合評価とする。評価の観点については、明確に示していないこともあるが、正確さや見た目の美しさなどの授業において指導している観点で評価するため、作品の仕上がりを見れば、誰もが納得できる。

前期の成績会議は、3月の中旬から下旬にかけて行われた。クラスごとに教科担任が集まり、校長・教頭・管理者とともに、生徒一人ひとりの成績について話し合う。校長または教頭が、全教科の合計点・平均点と共にクラス順位を読み上げる。欠席・遅刻についても報告される。

(6) 手工芸教育実践における問題点と解決法

ENFEFSにおけるC隊員の手工芸教育実践事例から、活動上の問題点とその解決法について述べる。

社会科1年の授業では、担当する教員が、校内外から作品の注文を受けてくることがあり、その製作のために時間がとられることが多かった。校内からの依頼があった作品づくりでは、学校の資金で材料を購入し、できあがった作品を販売し、その利益は学校のものであり、次の作品づくりの資金となる。生徒の興味をひいていたビーズアクセサリーづく



図8 スモック刺繡のクッション



図9 マクラメのかご

りを途中で中断し、依頼品づくりを開始した。そのため、生徒の意欲を継続するのがやや難しかった。後期は、前期に引き続きアクセサリーとかぎ針編みを並行して授業を行った。どちらも学校資金で材料を購入し、学校のために作品をつくったため、個人購入の場合に比べる授業に臨む意識は高くなかった。「学校のために働かされている」というのではなく、「技術も身につくし、学校のためにもなる」という意識で取り組めるような動機づけやはたらきかけが必要と思われた。

洋裁科1年の授業では、同じ教員がこのクラスの染色の授業も担当するため、手工芸の時間に絞り染めなどの準備をすることがあった。また、授業時間が4時間あるため、ベッドカバーなどの大作を共同でつくることもあった。ベッドカバーは大きいので、その刺繍は、完成までかなり時間を必要とした。生徒は、黙々と作業し、時折、刺繍の配色などに対するアドバイスを求められるが、基本的に担当教員だけで、十分授業が進められた。つまり、隊員の指導を常時必要とするクラスではなかった。そこで、この時間を利用して、隊員が教員に対して新しい技術を紹介したり、見本の試作をしたりすることがあった。ベッドカバーやタペストリーのデザインをセネガル人教員が選び、隊員は、その配色と一緒に考えることが多かった。大きな作品のため、製作時間が長くなるが、生徒たちは集中して作業に共同で取り組んでいた。刺繍の基本ステッチは既に習得していたので、隊員が特に技術的な指導をすることは少なく、隊員の存在意義について考えさせられた。

洋裁科2年では、日本から持参した刺繍の本の中から図案を選択し、作品を仕上げた。生徒が分担して、テーブルセンター2点、ランチョンマット6点を製作した。テーブルセンターは3000fCFA(約600円)、ランチョンマットは1500fCFA(約300円)で販売した。テーブルクロスなどは、洗った後、蛍光増白剤を溶かした液に浸し、さらに、のりづけして仕上げる。図案を描く時にカーボン紙を利用したため、下絵を濃く描きたものは、洗うのが大変であった。チャコペーパーではなく代用品としてカーボン紙を使うため、デザインを写す際に、仕上がりのことを考え、薄く描くように説明する必要があった。

指導員養成課程の2年生では、担当教員が、メッシュフラワーに意欲を示したため、材料を学校の資金でまかなうことにして、製作を試みた。よく伸びるメッシュの布でつくった造花であるが、ブローチや髪留めに応用できるのではないかというのが生徒や担当教員の意見であった。このクラスでは、ビーズアクセサリーづくりの際に、隊員が基本を少し示しただけで、後は自分たちで工夫して作品を仕上げていく姿が見られた。自分でアイデアを出し、応用していく力のある生徒が多かった。

教員養成課程・社会科1年のかぎ針編みの場合、女子学生は、全員基礎ができていたが、2人の男子

学生にとっては初めてのことで、戸惑いもあったようであった。しかし、回を重ねる度に、徐々に慣れていった。モニトリス(村落地域における指導員)経験者の中に、マクラメが得意な生徒がおり、教員に代わって応用作品を指導することがあった。昨年度まで指導員養成課程で学んでいた生徒と、実務経験のある社会人学生とでは、題材によっては、その技術に差が見られた。このクラスでは、材料を各自で準備したり、代表者がまとめて購入して、皆で分け合っ



図10 マクラメの吊りかごを持つ教員養成・社会科の生徒たち

たりすることがあった。

教員養成課程・レストラン科1年では、刺繍とビーズ飾りを施したテーブルクロスづくりを完成させることにした。そのため、その基礎となる小作品づくりから授業を始めることにした。テーブルクロスは学校からの依頼で製作しているの、材料費も学校の資金から出ている。テーブルクロスは1つのものを共同で仕上げるため、刺繍をする箇所を分担し、個別に評価できるようにした。順番に刺繍をしていくので、他の生徒はセネガル刺繍の基礎を練習した。



図11 教員養成・レストラン科の製作の様子
—夏休みに登校し、テーブルクロスの完成をめざす男子生徒—

教員養成課程・洋裁科1年では、生徒たちが興味を示したセネガル刺繍のブジュンブラから始めることにした。しかしながら、隊員自身がまず覚え、さらに複雑な刺繍の刺し方を説明しなければならなかったため、苦勞を要した。拡大見本を用いながら、段階を追って説明していくことで、なんとか生徒も理解できるようになった。慣れてくると、頭で考えず、手が覚えて刺していくため、隊員がその方法を改めて言葉で説明するのは大変だった。また、このセネガル刺繍には図案はないため、生徒たちは苦勞しながら、ノートに手順を記録していた。伝統的に、記憶と口述によって伝承・記録がなされてきたためである。

スマック刺繍をほどこしたクッションは、同僚の提案でつくることになった。サテン生地と中につめる細かいスポンジとボタンが2つあればできる。しるしつけをする時に、直接生地に書くように指示していたが、長い定規がないため、生徒たちは大変そうだった。大きさを決めて型紙をつくった方が、正確に美しく仕上げることができただろう。道具の不足を補う方法を考えることが大切であった。

以上を振り返ると、指導員養成課程や教員養成課程の生徒は、手工芸に対する意欲も高く、作品の完成度も高い。基本を身につけると、自分で工夫して応用作品に挑戦する。作品例などが載っている本を見たいと隊員に申し出たり、休み時間に積極的に質問したりと、より高度な技術を身につけようという志をもって取り組んでいた。そして、貪欲に技術を吸収したいという熱意や自分なりに工夫して作品づくりを行う姿が見られた。

一方、専門課程の生徒は、クラスによって実態が大きく異なった。2002年度の場合、



図12 クッションを持つ教員養成・洋裁科の生徒たち

全員そろって授業を受けた日は何回あったか…
 と思えるほど欠席者の多いクラスもあった。6
 人のクラスでは、2人休めば4人での授業とな
 る。そこに同僚と2人で指導に入る。そのため、
 隊員は、自身の存在意義に悩むことになった。
 生徒が一人しか出席せず、マンツーマンで指導
 することもあった。このような場合は、翌日の
 朝一番の授業時間に、教頭・管理者と生徒でク
 ラス会議が開かれる。その結果、奉仕活動をす
 ることもあった。クラスによっては、生徒の意
 欲向上が課題となった。

専門課程の2年目からは、科ごとにクラスが
 分かれるため、最大でも1クラス10人ほどであ
 った。多くのクラスが実質的に5人前後で行われ
 た。この人数にセネガル人教員と隊員の2人で
 指導するため、応用作品に取り組んでいる時な
 どは、毎時間指導する内容もなかった。マクラ
 メの作品をつくっているときは、生徒の補助や
 説明をすることもあるが、刺繍をしているクラ
 スでは、一緒に教室にいて、いつでも質問を受
 けられる状態でいながら、他のクラスの作品見
 本の製作をしていることもあった。黙々と作業
 する生徒の傍らで、これでいいのかと隊員が悩むこともあった。セネガル人教員は、手工芸のほかに
 も、調理や染色・洋裁・家庭経済・住居・衛生学など多くの教科を受け持っている。また、会議や試
 験の準備などにも忙しい。そのため、隊員が一人で授業をすることもあった。また、中には、私的な
 用件で授業を抜ける教員もおり、隊員がいるために教員自身があまり指導にあたらないのではないかと、
 隊員が活動することの弊害を危惧することもあった。

ENFEFSの職員の中には、ビーズアクセサリーをつくって販売している人がいる。生徒から「あ
 んなのをつくりたい」という要望を聞き、いくつかのクラスで学年末の授業に取り入れた。授業で行
 わなかったクラスの生徒からも休み時間に質問を受けるほど人気はあった。生徒がつかれるようにな
 れば、当然教員も作り方を知るため、自分でつくり始め、彼女からは買わなくなる。隊員は、生徒の
 ためだから、と考え自分を納得させたが、彼女の副業の邪魔をしているという想いもあって気兼ねし
 ていた。そんな想いを話すと、ある同僚から「生徒が技術を身につけられるんだから
 気にしなくてもいい」と言われ、迷いも消
 えすっきりしたという。



図14 ビーズアクセサリー



図13 マクラメの小物入れ

また、授業において、日本から持参した
 本のデザインを参考に作品づくりをするこ
 とがある。生徒たちは、自分なりにアレン
 ジして作品を仕上げているが、刺繍の図案
 に関しては、そのまま利用することが多い。
 個人のものになる場合は問題ないが、作品
 を販売する場合、図案をそのまま利用して

いいのか、気になる。知的財産所有権などの知識をもっている生徒たちであるので、今後、そのあたりをきちんとする必要があるだろう。オリジナルの図案が描けるようになるのが一番である。

また、刺繍やかぎ針編みの場合は、基本練習の作品が生徒の手元に残るが、マクラメやビーズアクセサリーなどは記録をしないと、繰り返し練習しない限り、忘れてしまう。ノートを準備していない生徒は、紙切れに書いたりしているが、これでは紛失してしまう可

能性が高い。手工芸の授業では、教科書がないので、後から思い出すためには、作品やノートが重要になる。編み方などの図もコピーしたものをばらばらに渡すので、専門課程の生徒の中には、それらをきちんと管理できていない者がいた。したがって、隊員が、題材ごとに生徒が利用できる補助教材のようなものをまとめることができるならば、教員や生徒個人だけではなく、学校組織の中に知識や技術などを蓄積し、組織のCDにつなげることができるだろう。

(7) 協力隊員の活動成果と課題

ENFEFSにおいて、4名の隊員が約7年半に渡って継続的に手工芸を中心に活動したことは、生徒や教員の技術の向上に貢献できたといえる。たとえば、刺繍は、材料費が高いこともあって、材料費が準備できるENFEFSのような学校でないと身につけることのできない技術である。村などで行われている染色やビーズ細工に比べれば、高度な技術を要する。刺繍の作品は、学校の資金でつくる人が多いため、作品を自分のものにすることができず、生徒の意欲は他の教材に比べると高くはない。しかし、刺繍の技術をしっかりと身につけることができれば、高額で売れる商品をつくることができる。また、商品として売るためだけではなく、材料費だけ用意できれば、自分や家族のために自分で作ることができる。初代A隊員が、粘り強く活動した結果、このような刺繍の技術力を高めることができた。また、B隊員は、外国人や裕福なセネガル人たちに売るためのものではなく、セネガル人、特に、生徒自身が「つくりたい」と思えるマクラメやセネガル刺繍などを取り入れていった。その際、どのような作品に人気が集まるのかを把握するため、B隊員が試作品を身につけ、「歩く見本」として生徒たちの関心をひくものを探っていた。基本的な技術に加え、好みや流行にも配慮した題材の提案を行ったのである。このように、刺繍などの基本的な技術は定着しつつあったが、歴代の隊員が残した技術は、ENFEFSの教員個人に対するものが多く、すべてを学校組織としての財産として残せたわけではなかった。技術をもっている教員がいても、それは個人の内に留まり、他の教員に伝わることはほとんどない。そのため、各隊員が、授業時間外や休日に希望する教員に教えたり、隊員が媒介となって、教員間で技術を伝えあったりした。しかし、「研究会」のような組織を学校内に設けるまでには至らなかった。C隊員が活動するころには、刺繍の技術における課題は、デザインの問題がほとんどで、型紙があれば、セネガル人教員が十分指導できるまでになっていた。同様に、マクラメやかぎ針編みについても、新しいデザインを求められることが多かった。このように、糸の始末や針のさし方、マクラメの結び方などの直接的な指導から、徐々にデザインの提供へと、隊員に求められる事柄が変化した。4代目のD隊員は、食分野を中心に活動したいという希望を持っており、手工芸の授業へかかわることはあまりなかった。このことは、隊員がいなくても、セネガル人教員に、自身で指導を行っていただくだけの力量がついたとも捉えることができる。つまり、4人の協力隊員が継



図15 ビーズの縁飾りをしたドイリー

続して活動したことが、手工芸の技術に新たな技術やデザインをもたらし、「ものづくり」への関心を高めることにつながったといえる。

4. 村落地域における「ものづくり」実践

村落開発普及員が、長年にわたって活動する中で、よく実践されている「ものづくり」は、染色と石けんづくりである。

染色では、白い生地を購入し、絞り染めをしてから染めて、色と模様をつけた生地を販売する場合と、色あせた服を染め直す場合とがある。一般的に、セネガルの大人が着る伝統的の衣服は、既成服ではなく、オーダーメイドであり、生地を購入し、好みのデザインに応じ注文をする。村落地域での染色は、村の女性グループや個人を対象にする場合と、女性技術センターで行う場合とがある。

石けんづくりは、既成の石けんを苛性ソーダや灰を使って増量し、再加工する作業をさす。少ない資金で始められる活動であるが、その分、得られる利益も少ない。そのため、現金収入を目的とする場合もあるが、支出削減面で意味があると考えられている。

(1) 染色指導

複数の村の女性グループを対象に染色活動を実施したF隊員によると、女性グループのセミナー受講経験や経済力、リーダーや材料・金庫係、書記などの役割分担ができていないか、またその指導力や業務遂行能力によって、染色が継続した活動となるかどうか左右された。

例えば、F隊員が前任者から引き継いで活動を行ったTouba Linguere村（県庁所在地の町から25 km内側、国道から離れている）の女性グループの場合、染色活動を行う上で、①材料費の回収、②利益計算、③材料の調達の問題点であった。

1つ目の問題点は、材料費の回収が困難なことであった。具体的には、初回の材料費を隊員が提供し、売れた時に、隊員が原価を回収し、利益を女性グループの収入にするという方法を取ろうとした。しかし、販売後にF隊員が原価分の材料費を回収しようとしたところ、次の資金にするために返済は待つよう頼まれ、布までも要望された。さらに、グループ内のリーダーと識字力のある1人のメンバーは借金の状況を認識しているが、彼女ら以外のメンバーには、借金の状況に対する認識がなかった。

第2の問題は、自分たちだけで利益計算ができない点であった。ほとんどのメンバーは字の読み書きができないため、原価を記録したり、書いてあるものを読んだりすることができなかった。また、染色に使用する染料の価格は、色によって異なるため、商品の価格は、色ごとに異なる原価に利益を加えなければならない。しかしながら、原価などを記録できず、また、読めないため、F隊員が教えてもそれらを忘れてしまった。さらに、一度染色した布を、「色が薄くてきれいじゃない」と言って、3度も染色をしたことがあったという。そして、この場合、染色代が3倍かかっていることに彼女たちは気づいていなかった。このように、自分たちで材料を購入していないため、儲けようという感覚が薄い点も問題であった。

3つ目の問題点は、材料の調達を女性グループ自身で行うことである。F隊員の前任者は、首都で購入した染料を、購入価格と同額で女性グループに売っていた。この方法で材料調達することは、隊員によって可能となっており、隊員が去った後は活動の継続が困難であるとF隊員は考えた。だが、交通費を考えると、染料を購入するために女性たちが首都や大都市まで行くことは困難であった。

①材料費の回収と②利益計算の問題を解決するために、F隊員は、染め直しの注文を増やすことを考えた。それは、染め直しの注文であれば、新しい布が必要ないため、初期費用は少なくすむからである。また、染める色によって原価は異なるが、料金を統一することで、利益計算の困難さがなくせる。さらに、染め直しの場合は、布地を染色して販売する場合に比べて、利益は少ないが、村の中での染め直しの注文を定期的に取りれば、技術を忘れないことにもつながると考えた。

③の材料調達の問題については、近隣の地方都市や週に一回開かれる市場などで、いつ、どこで、

何が買えるのかという情報を提供した。しかしながら、女性グループ自身で買いに行くことが交渉次第では、隊員より安く買えることや、自分たちで材料調達することが活動を継続するためによいことを話しても、具体的に「いつ誰がどこ買いに行くのか」というところまで、話が進まなかった。そこで、県の中心部の商人が、さらに大きな市場へ出かけた際に、染料をまとめて仕入れるようにはたらきかけ、実際に2つの個人商店が染料や布を扱い始めた。

一方、Nguith村（県庁所在地の町から4 km、国道沿い）では、女性グループの団結力や資金力などが全く異なった。染色のセミナーを開いたとき、材料代がすぐに出せたこと、グループのリーダーの統率力や、金庫管理、サブリーダーの役割も決まっていた。このような組織力があるグループの場合、隊員は、染色がうまくいかなかったときに助言したり、新しい活動内容を提案したりするだけで、自分たちで活動を続けていくことができた。

また、別のBalelCisse村では、NGOからの資金援助を受けて染色を始める予定であったが、資金援助が遅れ、予定していた時期に始められなかった。ここでも、初期費用が問題となった。予定の期日よりはおくれたものの、NGOによる染色セミナーが実施され、たらいや染料、手袋は女性グループのもとに残った。その後、彼女たちがすぐ、自主的に染色に取り組む姿は見られなかった。F隊員は、その理由を、彼女たちにとって染色が予想以上に大変であったためではないかと推測した。また、この村では、井戸から水を汲んでおり、家畜の飲み水と生活用水としての利用が優先され、染色のために水を使用する余裕がなかったためでもあった。しかし、雨季が過ぎると、再び染色を始めたという。F隊員が指示しなくてもお湯を沸かすなど、自主的に準備をして染色を行った。作業の途中で分量を間違えることがあったが、これは、記録していなかったため忘れてしまったことが原因であった。そのため、F隊員は、ノートに記録し、確認しながら作業を進めるよう指導した。

さらに、Khadji村の場合は、村内に複数の女性グループが存在した。F隊員が染色を指導したグループには、個人商店の経営者が含まれており、女性グループのリーダーよりも、その経営者が実際の活動でリーダーシップをとっていた。実際、彼女は金庫管理や材料管理をしており、F隊員には、役職が一人に集中しすぎているように思えた。しかしながら、グループの染色に対する意欲は高く、はじめから、自分たちで材料を調達することができた。さらに、染色の経験を重ねるごとに女性たちの技術は向上し、活動の成果は大きかった。ただ、活動を始める際の話し合いで、F隊員が染色技法を指導した後は、自分たちで教え合って技術を広げていくと確認していたが、実際には、染色していることを、他のグループの人々に話していなかった。これは、自分たちが学んだ知識を他人や他の村人に教えるのを嫌がるためである。このように、知識や技術の共有には、困難さが見られた。

ある村では、白い衣服の染め直しを行っていたが、後払いであったため、代金が回収できないという問題が浮上した。そこで、他の村の女性グループが染め直しを行う際、前払い制にしたらどうかとアドバイスしたところ、村人からの注文はこなくなった。F隊員は、村内での注文に限界があることに気づき、村外に市場を確保する必要性を感じた。

H隊員も、染色セミナーを実践していた。対象者は、女性グループが多かった。H隊員は、セミナーに慣れているグループとセミナーを経験していないグループでは、参加者の態度や染色活動の進行に大きな違いを感じた。

Ndiouffen Bambara村における染色セミナーは、隊員が染色の過程を一通り説明した後、女性たちが各自作業をするという方法で実施した。第一回目の染色セミナーでは、簡単な縛り染めと板挟み染めのみを行った。染色用のゴム手袋が破損していたため、染色作業を隊員が中心となって行い、女性たちは染料などを量った。この村は、UGAN (Union des Groupements Associes du Niombato: ニョンバト協同組合) の会員になっている村であり、野菜栽培などのセミナーを受けた経験があった。そのため、他の村に比べると、グループとしてまとまっており、集金がスムーズにできたり、数人が協力して作業を進めたりするなど、集団行動が見られた。

H隊員は、事前の準備や当日の手際よさに驚かされた。例えば、H隊員が村に着くとすぐに女性たちはセミナーの準備を始めた。プラスチック椅子を数十脚グループが管理しており、その他ゴザやたらいなどもすぐに準備された。それまでのH隊員が活動した村では考えられないことばかりだった。はじめに染色の種類や道具、一通りの流れについて説明をして、一番初歩的な縛り染めと板挟み染めの作業を行った。染める布は各自が準備し、1メートル当たり150fCFAを徴収することを、女性グループの代表者から全員に伝えた。当日見学を訪れていた村人の男性は、字が書けたため、H隊員が記録係を依頼し、参加者の名前と何メートル染めるのかを記録してもらった。セミナー終了後、そのリストを見ながら集金を行った。

他の村では、セミナーをする場合、女性たちは、説明を聞かずに勝手に作業を始めてしまい、「説明を聞いてから作業をする」という簡単なことがうまくいかないことがよくあった。それに対して、この村はセミナーに慣れており、H隊員には、分別もしっかりとついているように思われ、とてもやりやすく感じた。作業そのものも、数人が協力し合って進めており、H隊員がアドバイスをすることもなく、スムーズに進められた。セミナー終了後の集金作業も、抵抗なく進められ、H隊員がそれまで活動した村とは違って、お金に余裕があるような印象を受けた。女性たちがセミナーに慣れており、普段以上に滞りなく作業が進められたのは、リーダーがしっかりしているということ、全体的にグループ行動に慣れているためではないかと思われた。

一方、Diamaguene村は、H隊員が家庭訪問を繰り返しながら、活動を模索している村の一つであった。H隊員から見ると、代表者には、グループをまとめる意欲が感じられず、実際、女性たちもまとまる様子を見せなかった。しかし、H隊員が他の村で染色の指導をしていることを聞き、多くの女性から染色をやりたいと言う要望が出てきた。そこで、個人の自宅を利用して、染色教室を開いた。参加は自由、1メートル100fCFAを支払うことを条件として染色指導を行った。

最初に染色を行いたいと申し出た女性に指導することにした。他の女性たちには、村を訪問した時に、彼女の自宅で染色をする旨を伝え、興味がある人は布を持って来るように連絡をしておいた。当日、女性たちは出入りを繰り返したため、一日で全ての作業を終えることができなかった。そのため、2日後に再訪問して染色を続けた。

教える内容や個人の責任でお金を払うという点では、女性グループを対象にするのと同じではあるが、個々に集まった女性たちにまとまりは感じられなかった。それは、自分の分が終わったらさっさと帰ってしまい、後片付けなどをしなかったことからもうかがえた。結局、作業場となった家庭の子どもや女性が最後の片づけをすることになった。このように、H隊員は、Diamaguene村の女性たちとの活動にやりにくさを感じた。しかも、1メートル100fCFAの支払いに対しても、かなり文句が出た。「払いたくなかったらやらなきゃいい」と隊員が返すと「だったらもう帰れ」と言われる始末であった。そこで、H隊員が本当に帰ろうとすると、女性から「まだ残ってるからやって」と言われ、わがまま言いたい放題の彼女たちに立腹した。

2日間に渡って染色の指導を行ったが、染色技術が女性たちに確実に定着したとは言えなかった。ただ、基本的な技法については習得したように見受けられた。特に若い女性は積極的に、さまざまな技法を習得しようとするなど、やる気が見られた。そこで、H隊員は、やる気のある女性に対しては、個別にからげ縫い絞り染めなどいくつかの技法を指導した。このようにして学んだ女性が、他の女性に伝えてくれることを願った。H隊員は、自分が直接すべての女性に指導するよりも、村の女性たちの中に指導できる人を育てた方がうまくいくと感じた。

H隊員は、この村の染色指導を振り返って、技術の指導という点においては、文句を言いながらも女性たちは自分の手を動かして作業を行い、染色を経験することができた点については評価をしていた。そして、やる気のある女性に対しては、基本技術以外の技法についても説明できたため、興味があれば続けていくことも可能であると期待した。しかしながら、お金の支払いの段階で、また「まけ

て」と言う女性たちとのやりとりで、H隊員は、疲労困憊した。ただ、文句を言い合いながらも本気のケンカにならなかったのは、それだけ信頼関係がお互いにあるからであるとも感じられる。

(2) ニームクリームづくり

I隊員は、他の村落隊員の活動する村の女性たちに、ニームクリームづくりを教わった。この研修会は、J隊員が企画し、村落隊員を中心に4名が参加した。そして、村落開発普及員や青少年活動隊員として活動する隊員同士が新しい技術を学び合うよい機会となった。また、女性たちにとっては、教える側に立ったことで自信がもて、その後の活動への意欲喚起の機会にもなった。

ニームクリームのつくり方は、染色ほど難しくはなく、材料も村で買える石けんを使用するため、I隊員は、活動の継続性という観点から見てもよいのではないかと考えた。ニームの葉は、虫よけ効果が高く、マラリアの原因にもなる蚊よけとしての効果がある。

ニームクリームの作り方は次のようである。「①石けん(150fCFA/250g程度)を細かくスライスする、②ニームの葉を適量鍋に入れ、軽く浸る程度に水を入れ、煮出す(薄く色づく程度でよい。色が濃いとセネガル人は好まないらしい)、③ニームの葉を取り出し、スライスした石けんを入れ、静かに溶かす(かき混ぜると泡立つので、ゆっくりとまわすように)、④石けんが溶けたら油(アタイヤカップ3杯程度)を入れ、火から下ろし、空気を含ませるように混ぜる。あら熱が取れたら、手でさらに大きく混ぜると、次第にムース状になってくる。滑らかになれば完成(I隊員、第1号報告書)」。これを、大スプーン1杯25fCFAにて販売した。およそ100~200fCFAの利益が見込まれる。このように、セネガルの南部などの地域によっては、ニームの葉の入手が容易であるため、ニームクリームは、比較的簡単に導入ができる生産活動の一つであった。

(3) チューライロウソクづくり

I隊員は、村の女性たちの現金収入向上をめざし、土産物の生産・販売に取り組んだ。この村は、観光地に近く、ホテルの土産物売り場などの販売先を確保する事ができた。具体的には、チューライというセネガルの香料を混ぜた「チューライロウソク」と、「ブイ」というバオバブの実の粉などを生産・販売した。商品の品質改善やタグ・デザインの改定などを隊員と村の女性たちとが協力して行った。始めは、村の女性自身が生産する品質の安定をめざしていたが、次第に、生産状況に応じて、Saly近辺のホテルを中心に販売できるようになった。販売開始の2007年7月から10月初旬までの売り上げ合計は、チューライロウソクが55,800fCFA、ブイは、20,550fCFAであった。

チューライロウソクは、2007年3月の下旬にI隊員がデモンストレーションを行い、商品の製作を始めた。約半年後から、徐々に女性たち自身の手で生産活動を行えるようになってきた。隊員の指示やサポートは必要ではあるが、女性たち自身で材料の仕入れや商品の作成、ホテルへの納品、出納管理を行っている。活動を始めたばかりの初期段階は、商品の製作のための技術習得を、隊員が中心となって進めていた。隊員は、そのために必要な材料や、細かな道具などの準備を全て行い、女性グループが集まったときに、すぐに作業が取り掛かれるように気を配った。しかし、半年後には、「次回までの宿題」という形で作業を自宅作業に移行し、隊員と女性たちが集まる時には、商品の確認やラッピングなどの最終作業のみを行うまでになった。

また、会計管理に関しては、グルー



図16 チューライロウソク

プ内に読み書きと計算ができる女性があり、グループの資金管理を行っていることから、彼女に依頼し、帳簿つけを指導した。帳簿記帳の際には、「収入」なのか「支出」なのか混乱していることもあったが、「なぜそうなるのか」という理由を説明しながら、お金が「いつ」「どこに」「いくら」動いたかということと、「残高」を明確に記録できるように指導した。商品の売り上げに対する純利益等の細かい数字は計算しなかったが、原材料の費用や売上額に関しては、きちんと明細を記入するように指導した。

当初、チューライロウソクは、アロマキャンドルの一種として販売し、そのため、さまざまな色やデコレーションを施し、見た目もきれいにラッピングした。しかし、店舗に並ぶ同種のロウソクに比べて見劣りするため、アロマキャンドルとして売るのではなく、「セネガルのお土産」として売るものへと趣向を変えた。そして、セネガルの要素を前面に出すことを考え、商品説明のタグには、観光客はなかなかふれることができない、チューライロウソクに隠された「知られざるセネガル文化」の説明を加えた。また、視覚的にもアピールできるように、透明の袋に入れた「見本ろうそく」を各店舗に配置した。

ろうそくの色を、セネガル国旗のカラー3色にし、容器をアタイヤグラス(セネガルのお茶用グラス)にし、チューライ(セネガル人に欠かせない香料)を入れ、伝統衣装をつくるための布を用いた袋で包装するよう改善した。その結果、販売先のオーナーから「他と違って面白い」「見かけがかわいい」などの評価を得て、オフシーズンにも関わらず、売り上げを伸ばすことができた。

女性たちは、商品タグの穴を開けるための器具の使い方に戸惑っていた。I隊員は、定位置にセッティングできるようにマーカーでしるしをつけた。しかし、女性たちにとっては、視覚的に「きっちり合わせる」ことが難しかったようで、練習してもなかなかうまくできなかった。そこで、器具に厚紙を貼り付けることで、「奥までしっかりとタグをいれるだけ」で位置が定まるように工夫したところ、器具の使い方の説明もタグを付ける作業も容易になった。図画工作に親しんでいるI隊員をはじめとする協力隊員にとっては「なんとなく」できてしまう作業であった。しかし、女性グループのメンバーには経験がないため、「感覚」で定位置に穴を開ける作業はできなかった。I隊員は、彼女たちができないことに気づき、困難な部分をしっかりと見極め、その上で、できない部分を否定するのではなく、「簡単にできる工夫」をすることが大切だと実感した。

活動当初は、観光客向けの土産物として売れる品質に達していない不良品は、村内で格安価格で販売し、利益がマイナスになることも多くあった。しかし、半年後は、ほぼ全部を商品として確保することができた。そして、女性たちに、自信がついた。一方で、商品づくりになれば、多少乱雑になりがちの部分もでてきた。そのため、完成製品を女性グループのメンバー同士で互いに見ながら「商品にしてよいかどうか」の判断を女性たち自身で行うようにした。グループ内で「こうするともっときれいになる」等のアドバイスをお互いに加えながら、品質管理をめざした。

また、ロウソクづくりは、活動途中から各自の自宅で行っていたが、約半年後、メンバーが一堂に集まり、一緒につくる機会を設けたところ、きれいにつくれる女性が作り方を詳しく説明し、うまくできない点に関して質問している様子が伺えた。I隊員は、ある程度技術が定着した段階で、一緒に商品をつくりながら、よりよくするための工夫を交流する機会を設けることができよかったですと感じた。一方で、懸念される点として、女性グループの全員で始めたロウソクづくりの参加者が徐々に減少してきたことがあった。それは、ロウソクづくりが、「多少なりとも練習しなければならない」ことや、「時間にゆとりがなくなってしまった」ということが理由であった。活動開始半年後に参加しているメンバーは積極的であったが、販売数が伸びるにつれて彼女たちの負担が増えるのではないかとI隊員は心配した。

(4) ブイづくり

バオバブの実・ブイは、水に溶かし、砂糖などを加えてジュースにして使用される。I隊員は、こ

のバオバブの実を使用しやすいように粉末に加工し、販売することを考えた。当初、商品の売り出し方法（ラッピング・デザイン・タグなど）について具体案が固まらず、試行段階であったことと、生産活動を行えるグループがなかったという理由から、I隊員自身が作成・試作販売をしていた。I隊員の配属先である農村開発局の郡事務所所属するモニトリス（生活改良に関する指導員）の紹介により、月一度、各地方で行われるPresident（村の女性グループの代表者）会議に出席している会員で試作をすることになった。「生産活動」＝「初期費用がかかる」との理由ですぐに断られたが、必要材料はすべて揃っており、原料になるブイのみを調達してほしい旨を伝えたところ、快く引き受けてくれた。そこで、女性グループ代表者会議のメンバーの有志で構成されるグループの中心メンバーからの協力を得ることができ、商品の作成の流れを理解することから活動を始めた。

ブイの商品化に関しても、チューライロウソクの場合と同様に、「かわいく」「清潔に」「使いやすく」するための工夫をした。厚紙のタグの表面にバオバブの絵を大きく描き、わかりやすく興味を引くデザインにした。また、タグの裏面には効能や栄養価を表記し、使い方の分かりにくいブイの使用方を記したレシピを袋の中に追加した。セネガルで馴染みのあるジュースとしての利用法だけでなく、料理やお菓子にアレンジしたオリジナルメニューも掲載した。

また、糸で裁縫していた袋の一部を毛糸に替えたところ、手作り感が出て好評だった。しかし、生産者にとっては、「針に糸を入れるのが難しい」との声が出たため、かぎ針で編む方法に変更した。編む部分は、底を除いて三箇所あるので、毛糸の色をセネガル国旗の3色に変更した。さらに、熱でビニール袋の口を密封する機械を用いていたが、ファスナータイプの小袋に変更し、使用後の保存も容易にできるよう工夫を加えた。このことで、熱の通り方が均一でなく、熱で溶けた部分の間隙から粉がもれるという点も改良された。

セネガルに一定期間住んだ経験のある協力隊員やセネガル文化を知る人にとっては、「ブイ」は身近なもので、帰国時などに「もって帰りたい」お土産の一つである。しかし、実際のところ観光客にとってのインパクトが少なかった。それは、ホテルに売り込みに行った際に、「セネガル文化の紹介という意味合いで興味深いし、趣旨はよいが、売れる見込みが少ない」との理由で、なかなか受け入れてもらえなかったことから明らかとなった。アロマキャンドルは、もともと西洋の文化の一部でもあることから、新しい香りにも興味を引きやすいのに対し、ブイは敬遠されがちである。これはブイに限らず嗜好品全般に言えることだが、ターゲットは「健康」や「新しいもの」に興味がある人などに限定されるため、一人あたり一度に購入する数は多いとしても、万人受けしない。そのため、土産物屋には躊躇されがちだった。

女性グループと生産活動を開始した時期が、観光シーズンとずれてしまったため、新しい販売所の獲得には至らず、スローペースで活動を行った。シーズン中に売れ行きがどうなるか観察し、ブイの生産活動を続けるのか、やめるのかを女性グループと話し合いを行いながら活動を進めた。

(5) ビーズ細工

I隊員が特に「活動先」と考えてはいなかった別の村では、現金収入を求める声が多く聞かれたため、水増し石鹸づくりから活動を始め、村の様子を見てい

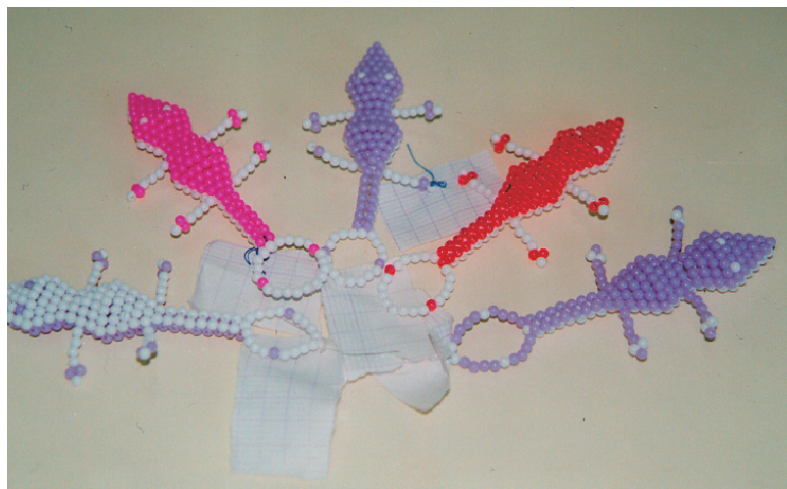


図17 ビーズのとかげキーホルダー

た。この村も観光地に比較的近い。そのため、村の男性はホテルの警備員として、家事を受け持たない若い女性はお手伝いさんとしてSalyやSomoneに出稼ぎに出ていた。I隊員は、女性グループの活動として「土産物づくり」による現金収入を行おうと考えていたが、実際に運営するのが困難なため、小規模な活動にとどめた。試作段階として、投資金額や物資の少ないビーズを使ったお土産で「トカゲ」や「セネガル国旗」のキーホルダーを導入してみたところ、村人からは「かわいい」と好評であったが、在庫数を確保する前の段階で村人の意欲は減退していった。原因としては、ベニエ（揚げ菓子）やジュースと違い、わずかながらもすぐに現金を手にするできないこと、細かい作業の割に時間を要すること、手間がかかることなどが考えられた。観光地に近いとはいえ、この村には水道もなく、普段の調理は薪で賄っていることから、女性の仕事が多く、こういった副業にける時間がもてないため、I隊員は、販売運営まで至らないと判断し、土産物による収入向上をめざすことは断念した。

また、セネガルに愛着をもっている人や、セネガル人にとっては、国旗やトカゲのキーホルダーは好評であったが、お土産として母国の家族・友人に買いたいものであるのかは疑問に残るところであった。現に、試作段階で作成したキーホルダーの一部をJICA事務所にて販売していたが、売れ行きは芳しくなかった。しかし、ビーズ細工を行ったことによって、女性グループのメンバーたちは、「自分たちでもつくりることができた」という自信をもち、製作への意欲がもてた。

その後、I隊員は、彼女たちとビーズアクセサリをつかった。「現金収入」ということにとらわれず、おしゃれにける支出削減のためにアクセサリをつくることにした。女性たちは材料費のみを負担し、彼女たち自身のためのものをつくるという方法に変更した。それらのアクセサリは、大きな市で売られている安価なアクセサリの1/3の値段でつくりことができること、他に似たものがないデザインであること、好きな色のビーズを選べることなどから喜ばれ、各家庭や小グループ単位でビーズ細工を楽しんだ。最初に「私はできないから…」と躊躇していた女性たちが、つくるうちに1つでは物足りなくなり、2～3個つくる様子を見たI隊員は、うれしい気持ちになった。また、個人的に販売意欲旺盛な女性たちから、「たくさん作って他の村で売りたい」との声もあがったので、I隊員は、彼女たちがやりたいことをサポートしていこうと考えた。

また、J隊員が、Ndiawrigne Mamoussé Diagne村でビーズ細工の講習会を実施した際は、女性のみでなく、村長をはじめ数人の男性も参加して楽しんだ。

このビーズアクセサリづくりは、村の子どもたちも行った。F隊員は、保健師の活動の合間に、子どもたちにビーズアクセサリづくりの機会を提供した。このビーズアクセサリづくりは、家政隊員としてENFEFSで活動していたC隊員の実践からヒントを得て始めたものであった。そして、それを村でもつくりやすいデザインに改良して取り入れた。例えば、ネックレスなどの金具は、都市部では入手しやすいが、村落地域では購入が難しい。そのため、金具を使わなくてもできるように、小さいビーズを輪にしたところへ大きなビーズを通して、首の後ろで留められるように改良した。この事例では、現金やサッカーボールなどを手に入れるため、何人もの子どもたちが積極的に取り組んだ。



図18 ビーズのアクセサリをした子どもたち



図19 ビーズアクセサリーをつくる村の子どもたち

子どもたちは生産活動の一部を担うが、仕入れや販売などは隊員が行った。そのため、子どもたちは、糸にビーズを通せば「手間賃」を稼ぐことができ、その場で収入が得られることとなった。売れ残った在庫を抱えるなどのリスクをとるのは隊員であった。また、F隊員が、子どもたちに、その都度「手間賃」を現金で渡す場合もあったが、F隊員がノートに記録・管理し、子どもたちが、各自の目標金額になってから、まとめてお金を受け取り、ボールなどを買う子が多かった。これは、子どもたちがつくる度に少額ずつ「手間賃」を受け取っても、すぐに使ってしまい、貯蓄できないため、金額の大きいものを買う場合には有効なしくみであった。また、アクセサリーの複雑な部分は、隊員がつくり、小さいビーズを順に通すだけの単純作業を子どもたちの「仕事」としたため、特別な技術がなくても参加できるというメリットがあった。逆に、このアクセサリーづくりは、隊員の存在なくしては、継続が困難であるという点がデメリットであった。

また、H隊員は、女性グループ現金収入を得るための手段として行うビーズ細工の活動を継続していくためには、リーダーの存在が大切であると考えた。特に、販売目的で生産活動を行おうとするならば、計算や読み書きのできる人間が、一人はいないと難しい。H隊員の活動する村では、読み書きのできる男性が書記を担当した。また、地方都市への材料の買い出しも、男性の協力を得た。元々あった女性グループの代表者がビーズ管理の責任者となり、製作者である村の女性たちの要求に従って材料を渡す。材料を受け取った女性たちは、家で内職をし、書記の男性に商品を提出する。書記の男性は、品質を確かめ、製作者リストに記載する。会計の女性は、書記が記録した帳簿を確認し、会計をチェックして、女性に作業代を支払う。販売責任者（2名）は、書記の男性から商品を預かり、市場や近隣村の住民に販売する。販売を担う女性が「若くてしっかり者」のため代表責任者に選ばれたが、



図20 ビーズアクセサリーの展示販売

実際は、書記の男性が経営管理において全体を調整・管理しているのが現状だという。しかし、このような組織が機能すれば、隊員の活動期間が終了した後も、自分たちで活動を継続していく可能性がある。

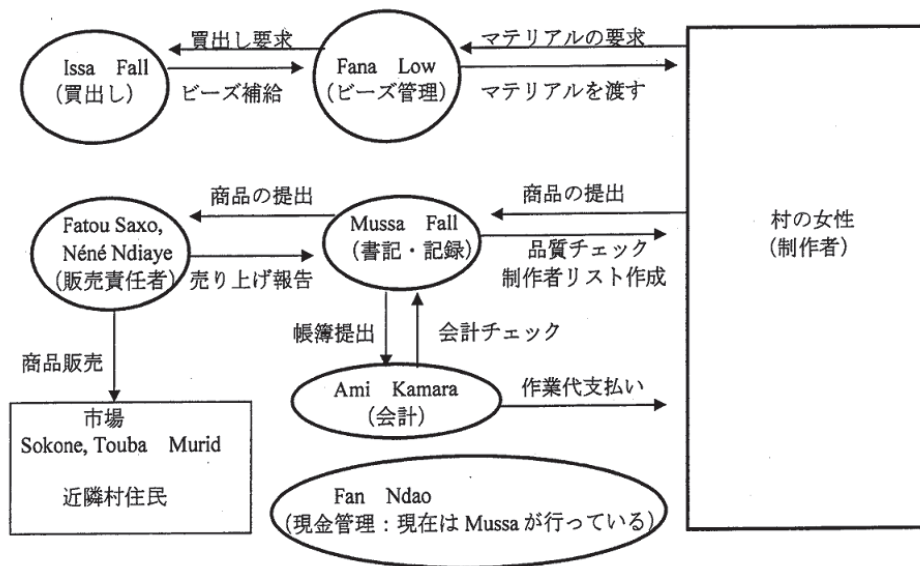


図21 村における運営状況, 2007年3月 (H隊員, 第5号報告書より)

(6) 「モノづくり分科会」の設立

2006年6月, 協力隊員は実行委員会を組織し, 第一回アイデアコンテストを開催した。それは, 飯山隊員⁵⁾によると, 「ものづくり」にかかわる協力隊員が, それぞれの活動において, セネガル人とつくりあげた「もの」をダカールに集め, 「事業化可能性部門」と「アイデア部門」においてコンテストを行うものであった。このコンテストは, 長期的には「セネガルの物産市場の発展をめざすもの」であるが, 短期的には, 「多くの人に商品を見てもらうことで, “こうしたら売れる” とか “こうしたらもっと良くなる” という意見をたくさんもらう機会をつくる」ことが目的であった。そして, コンテストの結果, 事業化可能性部門ではケベメールの乾燥肉, アイデア部門ではカオラックのマンゴー酢がそれぞれ優勝した。また, 同年12月に, 第二回アイデアコンテストが実施され, 魚団子と魚の揚げ春巻きが優勝し, J隊員の活動先の一つである「女性の家」の女性グループがつくったsac baobab (米袋を再利用したかばん) が2位に入った。そして, 2007年3月に, これらのコンテストとJICAセネガル事務所に設置されている「展示棚」による展示販売を統合して行うために組織されたのが,

「モノづくり分科会」である。これは, セネガル国内での零細事業の推進と隊員間の情報共有を目的とし, 隊員の職種や活動内容にかかわらず「モノづくりに興味がある人」は, 会員になることができる。主に, 隊員自身の生産活動を支援するための「講習会」や製作した商品売る機会としての「販売棚」やイベントを実施した (I隊員第3号報告書)。また, I隊員やJ隊員の活動先でつくったチューライロウソク (セネガルのお香を使ったアロマキャンドル) や端切れポシェット



図22 ビーズでつくったセネガル国旗

やかばんなどを、フェアトレード商品として、2007年7月に岐阜で行われた「ハローギフ・ハローワールド2007」のJICAコーナーで販売した。

I隊員によると、アイデアコンテストの参加者は、回数を重ねるとともに増え、商品の品質や種類も増えてきた。2007年11月に実施した第3回アイデアコンテストでは、「9カ所から、25種類の商品が集まり、魚加工商品（かまぼこ、干物、春巻き）やマングローブの蜂蜜、アフリカ特有のフルーツ（ピサップ・マンゴー・パパイヤなど）のジャム、シロップジュースなどの食料品、セネガル独特の香料を生かしたアロマキャンドル、バオバブの粉、伝統衣装に使われる布を利用した手芸品（かばん、財布、洋服）やアクセサリーなどバラエティに富んだ品揃えに、来場者はもちろんのこと、参加者自身も他の商品に興味津々の様子であった⁹⁾。そして、「参加した女性たちは、『収入』という実質的な利益を得ること以外に、実際に消費者に対応することや他の生産者との情報交換を通じて、『モノ作り』に対する意欲が向上し、片手間で行う『小遣い稼ぎ』としてではなく、家計を支えるための『ビジネス』としての今後の展開について自発的に話し合っていた⁹⁾という。



図23 くまのぬいぐるみ

(7) 村落地域における「ものづくり」の成果と課題

村の女性グループなどを対象とする手工芸は、現金収入に直結する手段として、ニーズは高い。そして、課題となるのが、初期費用と販路の開拓であった。ビーズアクセサリーを正しくつくり、「手間賃」としてその場で現金収入となる仕組みは、村の女性や子どもたちにとって、大変効果があった。

しかし、多くの活動で、材料の仕入れや販売を協力隊員に依存している点が課題であった。隊員の活動期間が終了した後も、女性グループだけで活動を持続させていくためには、リーダーシップやグループ内の役割分担が重要になる。H隊員のビーズ販売活動のように、読み書きや計算のできる村の男性の協力を得ながら、女性グループが機能するような組織の構築が必要である。また、活動初期は、需要に対し供給量が少なく、順調に販売できていても、類似品が増えれば、活動は停滞してしまう。そこで必要になるのが、新しいアイデアである。そのアイデアは、隊員だけでなく、農村開発局の地方事務所に所属する指導員（モニターやモニトリス）によって、得ることができる。最新の情報が得られる首都にある ENFEFSは、これらの指導員や女性技術センターで働く教員を養成している。ENFEFSを卒業した生徒たちが、これらの村の女性たちに新たな風をもたらす日も遠くないと思われる。

5. まとめ

本稿では、家政系の学校であるENFEFSと村落地域における手工芸実践を記録し、その意義と課題を考察した。ENFEFSにおいては、協力隊員による活動によって、学校組織や同僚教師に対して、新しい技術の定着やデザインの導入の面で大きく貢献した。また、授業を通して、生徒の手工芸技術の向上に努め、中には、すぐに実生活に役立てることができた例も見られた。このように、協力隊員は外部者として、生徒や教師の新たな技術に対する可能性を拓いた。

さらに、村落地域において「ものづくり」をしている協力隊員は、分科会を組織して互いの技術の向上をめざし、各自の活動に役立てることができた。また、アイデアコンテストなどで、それぞれの作品に対する評価が得られ、その後の活動に対する意欲の向上や、商品の改善につながったり、課題

となりやすい資金提供を受けることにつながったりした。また、協力隊員が、直接活動する村の女性グループなどにはたらきかけるだけでなく、NGOや女性技術センターの指導員と協力してセミナーなどを行うことで、より効果が得られるようになった。

このように、組織内における人間関係が良好であれば、そこで得られる成果も大きい。逆に、人間関係がうまくいっていないところでは、活動は苦痛となった。しかし、活動に行きづまっても、他の隊員や現地の人々、他の組織との関係がうまくいけば、そこで新たな活動が展開できた。

なにはともあれ、気温が45℃を越えることがあるような土地で、上記のような活動を行うには、心身の健康が第一である。そして、隊員自身が限られた材料で食事づくりをしたり、水の確保をしたりするなど日常生活の基盤を整えることが、活動以前に大切なことである。そして、あまり治安がよくない地域では、暴動や事件に巻き込まれないような配慮も求められる。このような状況下で、現地の人々の生活向上をめざす彼らの活動は、まさに草の根の協力活動といえるだろう。そして、手工芸をはじめとする「ものづくり」は、その手段としての一定の役割を果たしたといえよう。

尚、調理や食品加工など、食に関する実践については、次報で述べる。

【参考・引用文献】

- 1) 横山真智子, 杉原利治, 青年海外協力隊活動におけるものづくりの意義, 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 57, 2, p.127-147, 2009
- 2) 外務省, 政府開発援助 (ODA) 白書2007年版日本の国際協力, 79, 2007
- 3) 外務省, http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/pdfs/2004_g8.pdf
- 4) セネガル政府Webサイト, <http://www.gouv.sn/spip.php?article207>
- 5) 飯山亮平, セネガル通信6月号, 2006, 神奈川県Webサイト, <http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokusai/2eandc/messenger/20060630iiyama.html>
- 6) 野上智可, JICA Webサイト, <http://www2.jica.go.jp/hotangle/africa/senegal/000482.html>

【写真提供】

図1-15,17…C隊員

図18-20…E隊員

図16,22,23…JICA岐阜デスク国際協力推進員 (2007年)